

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

## 国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001793">https://doi.org/10.57529/00001793</a>

## 国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」

2010年10月3日（日）に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所主催、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表：星野英紀）の共催により国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」を開催した。

グローバル化が進むなか、日本社会も多文化社会時代を迎えている。宗教の点でも、日本の宗教が海外に進出するとともに、日本で活動する海外の宗教教団の数も増加の一途をたどっている。たとえば韓国のキリスト教の布教活動はきわめて盛んで目立ってきている。そのほか台湾の教団やヒन्दウー教系の教団なども進出している。

そのなかで、イスラームの存在感は決して無視できないものになってきている。たしかに欧米に比べれば相対的な比率はまだ小さいが、街中でスカーフをかぶったイスラームの女性を見ることは珍しくなくなってきたし、大学では留学生として接する機会も増えてきた。今後、さらにグローバル化が進むことが予測されるなかで、日本社会がどうイスラームと関わっていくのかを考えることが必要になってきているだろう。

そこで日本文化研究所主催の国際研究フォーラムとして、イスラームと日本社会の問題を取り上げることにした。また、前日の10月2日に研究開発推進機構主催で開催された公開学術講演会を連携企画として位置づけ、イスラーム研究の第一人者である京都大学の小杉泰教授に依頼し、「現代イスラームと日本社会」と題して講演をしていただいた。

本講演については、『國學院大學研究開発推進機構紀要』第3号（2011年3月刊行）に講演録を掲載しているので、そちらを参照していただきたい。ここでは国際研究フォーラムの概要を紹介する。

今回のフォーラムは、5名のパネリストと1名のコメンテーターを迎え、2010年10月3日10時から17時半まで國學院大學学術メディアセンター常磐松ホールを会場に行われた。下記に発題者とテーマを発題順に記す。司会はすべて井上順孝教授が行った。

発題1：三木英氏（大阪国際大学）「モスクが来た街：地域住民のイスラーム『受容』」（日本語）

発題2：Isam Hamza氏（エジプト、カイロ大学）「イスラームは日本の宗教になり得るか」（日本語）

発題3：Salih Yucel氏（オーストラリア、モナッシュ大学）“Is Islam part of the problem or solution: An Australian immigrant experience?”（英語）

発題4：Gritt Klinkhammer氏（ドイツ、ブレーメン大学）“Germany - Problems and developments of religious and cultural Integration”（英語）

発題5：中西俊裕氏（日本経済新聞社）「イスラーム世界との絆—広がる交流のすそ野・産官学を軸に」（日本語）

コメンテーター：師岡カリーマ・エルサムニー氏（慶應義塾大学、獨協大学、アナウンサー）

次に各発題の内容を紹介する。

三木氏は科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の研究で、日本に來ている海外の教団の調査を行っている。今回の発表はその調査の経験に基くものである。三木氏によれば、2010年10月現在、日本国内には59のモスクがあり、90年代以降、ビジネスや留学のために來日したムスリムの信仰の場となっている。調査を行った大阪モスク（旧出來島モスク）は100名を超えるムスリムが訪れる元専門学校の校舎を利用したモスクで、さまざまな立場の人々がかかわっているという。茨木モスクのほうは、近隣にある大学の留学生が集う新しい一戸建て住宅のモスクである。発表では、この2つのモスクと地域住民との関係について、媒介者の役割などを紹介しながら報告を行った。

Hamza氏は、長く日本に暮らし、日本の国学について研究を行った経験を持つ。その経験と学識をもとに、明治以來の日本とイスラームの関係、日本におけるイスラーム研究の歴史を述べ、その上でイスラームの日本化、すなわち「日本型イスラーム」になれるかどうか、日本で宗教の一つとしてイスラームが受け入れられるためにはポイントとなると述べた。

Yucel氏は、オーストラリアのモナシュ大学で、ムスリム移民の研究を行っている。多文化化が日本よりも早く進んだオーストラリアが、どうムスリムと共生しているかという点は、日本でも参考になる部分があると考え、今回発題を依頼することとした。発題は次の3つの角度から行われた。A)ムスリムはオーストラリアをどのように見ているのか。彼らの社会への貢献はどのようなものなのか。B)オーストラリアにおけるムスリムの生活の中でイスラームが果たす役割。C)日本人はオーストラリアのムスリム移民の事例から何を教訓として引き出せるか。

Klinkhammer氏は、トルコからのムスリ

ム移民が多いドイツの状況を紹介した。ドイツのムスリム移民は、第2世代に入っており、ドイツに生まれたムスリムの若者が増えている。彼らは、ドイツ社会のなかで問題として目立っているが、近年ではその問題を解決しようという新しいネットワーク構築なども進んでおり、差別の解消だけではなく、共同参画社会に向けた取り組みが生まれていることを論じた。

中西氏は、日本経済新聞社で長年中東問題や日本のイスラームの問題を取材してきた経験を持つ。その経験をもとに、政府、企業、大学が、現在イスラームへの理解を深め、つながりを深めようとしている現状を紹介し、それぞれどのように取り組んでいるのかを紹介した。そのなかで、専門家が不足しているという問題点を挙げ、日本人のムスリムが貢献する余地があることを論じた。

これらの発題を踏まえ、師岡氏がコメントを加えた。師岡氏は、エジプト人の父と日本人の母を持つ。現在ムスリマ（女性のイスラーム教徒）として日本で働き、生活を送っている。その立場からさまざまな指摘がなされた。まず、フォーラムのタイトルが「イスラームと向かい合う日本社会」となっていることについて、「向かい合う」という表現は、あくまでも他者としてイスラームを扱っていることを示しているという鋭い指摘があった。そのことに関連して、今現在日本社会のなかでそれほどムスリムへの排除感情がないのは、ムスリムが日本人にとって遠い存在、完全な他者というイメージがあるからであろうとし、今後日本人ムスリムが増えていき、日本社会での存在感が目立ってくれば、その感情はまた異なったものになってくるのではないかという。その場合、日本人ムスリムが見た目も含めてどう溶け込んでいくか、他者にならないためにはなにが必要かを考えるべきであると述べた。

その後の質疑応答では、イスラームが進化

論についてどう扱うのかという質問や、日本人が知識がないがゆえにマンガなどで宗教的表象を描いてしまうことについての問いかけなどがあった。それに対して、Hamsa氏より、エジプトでは知識として進化論は教えているという回答があった。またマンガについては、その形態が受け入れやすいということが問題であると指摘された。とくに進化論については師岡氏や Yucel 氏からも意見が述べられ、活発な議論になった。

会場には 100 名近くの参加者があり、トルコ協会の方など、日本在住のムスリムの方も

多数参加されていた。ムスリムの方からは、礼拝を行う許可を求められるという経験もし、前日の懇親会では、ハラール・フード（イスラームで食すことを許されているもの）を用意することが、日本でいかに面倒かを体験した。こうした体験は、今後多くの日本人が体験するものであろう。発題者からは、ムスリム側からの働きかけや工夫について、その必要性が指摘され、論じられたが、日本社会の側でどのような準備をすればいいのか、今後ますます議論を重ねていく必要があると感じた。

(平藤喜久子)



議論の様子